

1月の植物

スイセン（ヒガンバナ科スイセン属）

Narcissus tazetta L. var. *chinensis* M.Roem.

昨今、外来種は疎遠にされる傾向があるが、親しまれている外来種（帰化植物）も多い。スイセンもそのひとつであり中国渡来の外来種で古くから日本に馴染みが深く、この季節野山や花壇などでよく目にするることができる。

花期は12月～4月。花茎から伸びた直立するつぼみは横向きになり白い花を開花させ、良い香りを放つ。草丈は15 - 50cm程度。種はできず球根（鱗茎）で増殖するが、生命力が強く球根を花壇に放っておいても葉や花茎が伸びて冬季に花を咲かせる。球根は黒い皮に包まれ「壺」のような形をしている。花のつくりは白い花びら6枚（外側3枚はがく）と中心の黄色い筒状の部分（副冠といい雄しべについている托葉）それにめしべ1本、おしべ6本などで構成されている。

原産地は地中海沿岸周辺で、日本にはシルクロードを経て中国を経由し渡来したと言われ、伊豆半島、房総半島、淡路島、越前、九州の海岸などに群落をなしている。佐賀県内には東松浦半島に野生化したものがある。

全草に毒成分のリコリンなどが含まれるが腫れ物などの薬用としても用いられる。時々食用のニラと間違えて食中毒（嘔吐、呼吸不正）を起こすという事故も報告されている。

名前は中国名のスイセンの音読みで、学名は伝説の美少年「ナルキッス」からつけられたとされる。花言葉は神秘、1月13日の誕生花。 （文責：井手義信）

（参考）日本維管束植物目録、薬草ハンドブック、身近な植物「観察のポイント」、図説植物用語辞典ほか



2019.12.31 小城市牛津町